

# Rintaro Akamatsu Piano Collection Vol.8

## Lustig - Traurig

新野見卓也

バガテル WoO.54 につけられた「喜び-悲しみ」というタイトルは象徴的だ。ここでは「喜び」と「悲しみ」はあくまでハイフンで繋がる関係にある。「喜び『と』 悲しみ」ではない。ハ長調が同主短調を経て回帰するだけの単純な三部形式に、壮大な物語や「と」で示されうるような対立はない。ソナタ形式のような発展を経ることなく、「喜び」・「悲しみ」がそのままに連なっている。そしてこのハイフンで表されるような関係は、ここに収められた一連の楽曲のひとつの聴き方を示唆してくれるだろう。

アルバムを中心となる《悲愴》ソナタ Op.13 には、題名に違わず同時代に類をみない感情のドラマ——ひとまずは「悲しみ」のドラマと言えそうだ——が刻まれている。鍵盤楽器における感情表現の深さと大胆さにおいて、音楽史は一步前に進んだ。だがおそらく近い時期に作曲されたであろう WoO.54 の副題、本盤の「喜び-悲しみ」というタイトルのもとに聴くならば、この大作もまた新たな顔を見せてくれるかもしれない。

ふつう長調と短調は対立すると思われている。正確に言い換えれば、両者の表現ないし表象は対立するものと思われている。つまり前者は「喜び」の調であって、後者は「悲しみ」のそれとされる。もちろんそれは音響の理論と感情的・身体的自然との一致の感覚として、かなりの程度共有されるだろう。だがそれはけっして長調が「喜び」、短調が「悲しみ」だけと結びつきうるということではない。

たとえば第1楽章の、内声の焦燥を伴いながら鍵盤の両端を目指して漸進・邁進するあのダイナミックな動き。これは提示部では変ホ長調、再現部ではハ短調で表れる。理屈にしたがうならばじめは「喜び」の、2度目は「悲しみ」の奔出だろう。だが胸騒ぎを伴う「喜び」は完全な「喜び」だろうか？ 「悲しみ」の堆積の果てのカタルシスは、転じてひとつの「喜び」たりえないか？

耳を澄ませるならば、このソナタのいたるところに長調と短調の交代が、ミクロにもマクロにも、聴かれる。そしてその度にひとつの感情に落とし込むことのできない、ハイフンでつながれた「喜び-悲しみ」に出会うことになる。「喜び」と「悲しみ」は必ずしも相剋しない。両者はたんに並びもすれば、互いを自らのうちに含みもする。このことに気づいたならば、私たちはこの作品の脈動を、《悲愴》という題意から一步踏み込んで、「『喜び-悲しみ』のドラマ」と言い換えることもできよう。

大ソナタのそこかしこに聴かれた「喜び-悲しみ」の揺動はしかし、続くメヌエット **WoO.82** とアレグロ (バガテル) **WoO.56** では一旦落ち着きを見せる。《悲愴》の平行調と同主調で書かれた両曲には、軽やかな「喜び」が漂う。ただし私たちの耳は突然のオクターヴのユニゾンや、一瞬の平行短調の出現に、揺れる感情を聴き逃しはしないだろう。

「喜び-悲しみ」をめぐるちいさな旅は、**ピアノ小品 WoO.60** でひとまずの終わりをむかえる。とはいえこの一見チャーミングな作品は、安易な理解を拒む。1818年に、すなわち《ハンマークラヴィーア》と同時期に作曲されたことを思えば当然ともいえる。ここに用いられているリズム法、対位法、転調その他作曲技法は、この39小節を小宇宙と呼ばしめるほどに多彩だ。やがて一連の後期の傑作群へと結実する試行の端緒には、すでに端倪すべからざるものがある。ここから作曲家最後の弦楽四重奏曲まで、技法のみならず「喜び-悲しみ」の様相においても、そう隔たってはいないだろう。

ちいさな旅を終えた私たちの耳は、いまや「喜び-悲しみ」に感応する。そして私たちはここからまた、新しい旅を始めることができるだろう。いまだ聴かれざるベートーヴェンが待っている。